広がる「自死」への言い換え

「自殺」から「自死」へ。島根県が全国の自治体に先駆けて決めた言い換えが少しずつ広がっている。言い換えを働きかけた島根の自死遺族は「自死について語りやすくなることで、予防や防止につながってほしい」。23日には、言葉の問題をテーマに大阪でフォーラムがある。

島根の遺族女性　働きかけ実る

手のひら大の袋の中にフィルムケース。振ると、カタカタと音がする。おかん、がんばれよ――。島根県出雲市の桑原正好さん(64)にはそう聞こえる。

入っているのは、次男大輔さん（当時24）の遺骨だ。肌身離さず持ち歩く。

四十九日の前、長男に頼んで墓の下の骨つぼから骨を出してもらった。死を、納得できなかったからだ。「いつも一緒にいること。これが私の供養」

2006年の年末。夜、仕事中だった桑原さんの携帯電話にメールが届いた。「24年間ありがとうございました。こんな形で終わってしまってごめん」

大輔さんからだった。借金トラブルをうかがわせる内容。帰り道で読んだ時は真剣に受け止めなかった。帰宅すると、他の家族にも連絡が届いていた。総出で捜した。

深夜。海を望む崖で、大輔さんの車を見つけた。車内で練炭をたいていた。

「早く家に帰ろう」

眠っているような姿にそう声をかけた。

◇　◇

励ましの言葉をかけられたくなくて、人目を避けた。33年勤めた会社も辞めた。近くの墓にさえ、深夜に参った。

鉛の塊が胸に入ったような悲しみ。「トドみたい」と大輔さんに笑われた体重は半年で15キロも落ちた。大輔さんが生まれた夕方になると、体に痛みが走った。大輔さんがきょうだい2人と一緒にいる写真を数百枚、部屋に飾った。

それまで、「自殺」の話を聞いても、「罪な人たち」「なんでわからんかったかね」。自分の中にある「自殺」への差別や偏見が、すべて自分に向かった。

07年7月、新聞に載っていた子どもを亡くした親の会に参加。遺族らは「自死」という言葉で語り合っていた。やさしい言葉だと思った。

遺族が相手だと、安心して話せた。泣くこともできた。全国の遺族の会を訪ねた。08年8月、自死遺族が集える「しまね分かち合いの会・虹」を立ち上げた。

「『殺』が使われるのは残虐な言葉ばかり。どうして自分で逝く時も『殺』なのか」

県に「自死」への言い換えを働きかけた。13年3月、島根県は全国の自治体で初めて、公文書などで自殺を自死と言い換えることを決めた。

◇　◇

大輔さんは野球が好きだった。高校3年の県大会ではベスト4まで進んだ。全力疾走やスライディングする姿、縦じまのユニホームがまぶしかった。

そんな思い出も、「自殺」のままでは話せなかった。「自死」が広まり、「命の閉じ方の一つ。罪ある死じゃない」と思えるようになった。

「言い換えは第一歩。悲しみを語るきっかけが増えることで、つらい思いをする遺族が少しでも減れば」

大輔さんの写真や小学校時代の野球道具を前に思いを語る桑原正好さん＝島根県出雲市（画像の一部を加工しています）

「やさしい言葉」次男の死を語れるように

鳥取県・宮城県でも表記統一

島根県では09年、桑原さんが県自殺総合対策連絡協議会にオブザーバー参加。12年2月に委員となり、「自死」への言い換えを提案した。

ちょうど県自殺対策総合計画の改定作業が始まる時期だった。医師や弁護士らも加わる協議会で議論を重ねた。

翌年1月、「自死（自殺）」と併記した暫定計画案でパブリックコメントを実施。「自死になることで遺族の苦悩を和らげる」などの声が寄せられ、3月、併記をやめて「自死」への統一を決めた。

島根県の言い換え決定に続き、鳥取県（13年7月）、宮城県（14年1月）、仙台市（同年8月）も言い換えを決めた。全国自死遺族連絡会（仙台市）は10年から、内閣府などに言い換えを要望し続けている。

島根の取り組みに勇気づけられた大阪府枚方市の竹井京子さん(65)も枚方市に言い換えを要望することにしている。竹井さんは05年、一人息子の大地さん（当時19）を自死で亡くした。2年後、自死遺族らで「ふきのとうの会」を立ち上げた。

関西では「身内から出たのを知られたくない」「恥だ」という風潮が強いと竹井さんは言う。言い換えにも、「『自殺』の方が抑止力があるのでは」と言う遺族もいる。

でも、竹井さんは「自殺と言われると、子どもの死を傷つけられたように感じる」。大阪府や大阪市への要望も検討したいという。

（一色涼）

23日　大阪・枚方でフォーラム

フォーラム「私の大切な人を『自分殺し』と呼ばないで」の主催は大阪市のＮＰＯ法人「働く者のメンタルヘルス相談室」。理事長の伊福達彦さん(70)も自死遺族だ。

40年以上前、人間関係に悩んだ妻が電車に飛び込んだ。１年ほど、毎日涙を流した。転職後にうつ病での解雇や自死に直面し、うつ病休職者を支援するＮＰＯをつくった。

「だれもが遺族になる可能性がある社会で、互いを尊重する言葉を使うべきでは」。今回、言葉をテーマに据えた理由をそう話す。

フォーラムは23日午後１時から、大阪府枚方市の「ラポールひらかた」。定員100人。島根の桑原さんや枚方の竹井さんら自死遺族が語る。

併せて21～23日、自死で亡くなった50人の写真や遺書を紹介するパネル展「私の中で今、生きているあなた」が開かれる。

（第3種郵便物認可）　2014年（平成26年）11月20日（木曜日）　讀

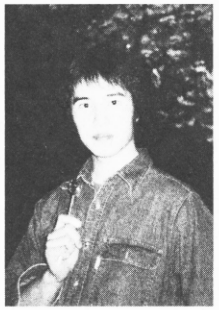
自死遺族 傷つく心

偏見払拭へ 「自殺」を言い換えて

愛する人が自ら命を絶ったあと、つらい気持ちを抱えて生きてきた遺族が思いを語るフォーラムが23日、枚方市新町の市立総合福祉会館「ラポールひらかた」で開かれる。「自殺」ではなく、「自死」と言ってほしいと望む遺族が多いことから、テーマは「私の大切な人を『自分殺し』と呼ばないで」。関係者は「社会が自死という言い方について考えるきっかけになれば」と願い、参加を呼びかけている。

（広瀬毅）

竹井京子さん



亡くなった大地さん

枚方で23日 フォーラム

フォーラムは、大阪市のNPO法人「働く者のメンタルヘルス相談室」が各地で不定期に実施しており、当日は遺族3人が胸の内を明かす。

同市の竹井京子さん（65）は今回、初めて講演する。2005年11月、一人息子の大地さんを19歳で亡くした。遺族同士で語り合い、悲しみを分かちあう「ふきのとうの会」の活動を07年5月から始めて7年半。「ようやく元気が出て、みなさんに話せるようになりました」と語る。

訴えたいのは、自殺という言葉が、残された遺族をさらに傷つけているということ。「殺」が犯罪を連想させ、家族に問題があったと疑われたり、好奇の目にさらされたりすることもあるという。「『言葉だけ変えても仕方がない』という声もありますが、そうした偏見をなくす第一歩にしたいんです」と力を込める。

島根県の自死遺族でつくるグループの代表、桑原正好（しょうこ）さん（64）は、06年12月に次男を失った。

同県は桑原さんらの要望を受け、昨年度以降、公文書で自殺という言葉を自死に言い換えており、「言葉を変えることで体験を語る遺族が増え、自死の予防につながるかもしれません」と期待する。フォーラムでは清水新二・奈良女子大名誉教授の基調講演もある。

会場では21～23日、亡くなった50人の写真やプロフィル、遺族のメッセージなどを並べたパネル展も開かれる。竹井さんは大地さんへの思いを「会いたい」と題した文章でつづっている。同展は40回目となるが、今回で終了するという。

合わせて、東日本大震災の被災地・福島県双葉町の避難所をテーマにした写真展も行われる。

入場無料。問い合わせは、同相談室（06・6242・8596）へ。